

フランスのカフェの研究

山井徳行

Etude sur les Cafés en France

Noriyuki YAMAI

序章 個人的経験から

平成四年七月六日の正午頃、カーテル (Cartel) というカフェに初めて入り、カウンターで生ビール (Un demi) を注文した。フランス語教授法の研修に参加するためにやって来た、フランスのアリエ県にある温泉で有名なビシー (Vichy) という街でのことである。そのカフェは、学生食堂も兼ねている市営食堂の近くにあり、客層はその界隈の馴染み客が大半という庶民的なものである。煙草や雑誌も売っていてかなり人の出入りが多い。私が入った時には、食事の前に一杯引っ掛ける人間達でかなり賑わっていた。初めてなので、なんとなくぎこちない視線を感じもしたが、眉毛の濃い大きな鼻の無愛想なパトロンの目が優しいのを感じ取ってカウンター越しにこちらから話し掛けていった。

「私は三日前にビシーに着いたばかりなんです。ここのカピラム (CAVILAM) で六週間程勉強するためです。昔、フランスに長く居たことがあるんですが、ビシーは初めてです。なかなかいい街ですね。ところで、その市営食堂の食事の評判は如何ですか。……」こちらはこの街で一か月半程生活しようというのだから、自己紹介するようにこちらの存在理由を相手に告げるのは、仁義を切るようなものである。何処の国でも匿名空間のあるような所では、どここの馬の骨ともわからないような人間は警戒されるのは当然で、そんな相手の気持ちをほぐすことから始めないといけない。暫く喋っているうちに、カウンターの所に陣取っていた若い三人の男が話に乗ってきた。天気・景気・政治・ビシーのことなど話が弾み、食堂の閉店時間前に着くようにそこを出た時はもう一時近かった。外の新鮮な空気を吸いながら、話をしたことに満足していた。ふらりと一人で見知らぬカフェに入り、初めて会った人間たちとわいわい世間話が出来たことで、異国にいる孤独が一瞬慰められていた。結局、七月中 (八月はバカンスのため休業であった)、食事の前にそのカフェで一杯飲むのが習慣になった。

人口三万程のビシーの街はこじんまりしている。ビシー駅からアリエ川 (Allier) に向かう道路がパリ通り (Rue de Paris) である。その通りがクレモンソー通り (Rue G. Clemenceau) と突き当たる所に四つ辻広場 (Place des quatre chemins) がある。その広場に面して五つのカフェがあり、ビシーの街でもいちばん人が集まる所である。学生食堂で昼食・夕食を済ませてから、そこに陣取って色々な国の留学生や研修生と雑談や議論をしたのが今回の研修のよい思い出である。

街を散歩している時、歩道の半分以上を占領しているその椅子にひょいと腰掛ける。それは

実に気楽である。別に散歩をやめたのではない。自分の回りを人が行き交う。私は、ヨーロッパ人・アジア人・アフリカ人など実に多様な老若男女の通行人に目を当てながら、何かを飲んだり議論したりしている。彼らの視線もすーと私を掠めていく。

私の横には、ガザからきたパレスチナ人のフランス語教師アニスがいる。その隣には、シリア人の言語学者ナビブが育ちの良い横顔を見せて、スペイン人のフランス語教師アリサに冗談を言っている。ハンガリーに留学したままそこに居つきその奥さんを貰って、今はフランス語を教える生計を立てているアルジェリア人ナビムが、エストニア人のエドモンデスと議論に熱中している。もう午後九時を回っているが、夏のフランスはまだ透明な日の光が街を明るくしている。手を上げて我々に合図しているのはギリシャ人のフランス語教師の一団である。これから何処かに遊びに行くらしい。広場に面した五つのカフェは、飲み物の料金が際立って高い一つを除いてどこもほぼ満員である。我々は果てし無い会話にのめり込んでいく。しかし、喋ることに対するなんという情熱であろう。私は、夜風を頬に感じながら、四方八方からわきたくてくる会話のざわめきに聞き入っている。日本には無い風景である。

その夏の八月十五日の午後、パリの二十区、ポルト＝ド＝バニョレ (Porte de Bagnolet) の界隈の庶民的なカフェに入り、カウンターで生ビールを注文した。店内の大半をカウンターが占めている。角にあるそのカフェの両側の歩道の上にテーブルと椅子が並べてある。硝子の仕切りは大きく開け放たれて、街の風が心地よい。アペリテフの時間でカウンターはなかなか混んでいた。昼食のバゲットが無造作にそこに置かれてある。わたしは注意しながら、泡の立つビールの入った足の長いグラスを置いた。始めて入ったそのカフェには夏のバカンスの寛いだ雰囲気があった。空も青かった。頬に不精ひげを生やした痩せぎすの労働者風の男が私の横にやって来て、ビールの入ったグラスを取り上げた。どうやらバゲットの持ち主らしい。彼は気分良さそうに話し掛けてきた。

「ちょっと話をしてもよろしいか」

「いいですよ」、私は気楽に応じた。

カウンターの周囲は気楽な場所である。私は暫くの間、その男の身の上話を聞かされることになった。久し振りにパリのカフェに入った私にとって、見知らぬ男の人生の輪郭をなぞることも楽しいことだった。こんなことは日本ではなかなか経験できない。フランスにいるのだ、という実感が湧いた。

以上はこの夏、フランスに二カ月ほど私が滞在したときのカフェに関する体験の一部である。フランスにおけるカフェの持つ役割あるいは文化といったもの一端を浮き彫りにしていると言えないであろうか。

さて、この研究をこのように自分の個人的体験から始めたことに関して、説明を加えておこう。この研究の主題は、フランス社会においてカフェの持っている出会いの場としての社会的役割を明確にすることである。カフェの客観的・物質的側面はその建物・設備さらに提供される飲食物に求められよう。しかし、カフェの本質はそこに集まる人間達の交渉・関係、いわばその空間の特殊な人間化にあるので、いわゆる科学的基準・言語によっては把握されないであろう。カフェの外観・内部の構造等も上述の本質によって変容されており、それは一つの主体によって解釈されることによって始めて明確になる、と言えよう。フランスの都市に関して興味深い本を書いた Pierre SANSOT は次のように言う。

Il semble bien admis que nous ne pouvons dissocier le couple que le sujet et l'objet forment. Un subjectivisme absolu comme un objectivisme naïf paraissent peu soutenables. Qui oserait nier la

part du sujet ! Il n'y a d'objet que par référence à un sujet, qu'il soit en ce moment pensé et perçu par moi ou que d'une façon générale, il soit pensable, percevable par un autre sujet que moi. En l'absence d'une conscience, l'objet c'est encore, ce qui est, en droit, perceptible, offert, exposé à une conscience possible. La notion de projet est venue confirmer cette nécessité de ne pas omettre la part de l'homme. Le monde se différencie, se qualifie au regard d'un être qui cherche à réaliser certaines fins et qui, par et dans cet effort, fait lever des ustensiles, des appuis, ou des obstacles. En revanche le monde est toujours déjà là. Se détourner de lui, c'est encore prendre parti à son égard, et, si l'intentionnalité définit le mode d'être de la conscience, il faut bien un objet pour remplir cette visée. On a donc abandonné la thèse d'un sujet qui se suffirait à lui-même et qui découvrirait, dans son propre intérieur, des richesses suffisantes pour alimenter sa vie intellectuelle. (*Poétique de La Ville*, p. 9, Paris, Meridiens Klincksieck, 1988)

このように、主題を柱とした (pôle-sujet)、対象に向かうアプローチ (approche objectale)こそ、街という極めて錯綜した社会的な空間を研究するもっともよい手段であると彼は言う。我々の主題、カフェの探求にもこれは当て嵌まる。何故ならば、多くの人間が自由に出会う場所こそカフェであり、それは街の重要な構成要素であると同時に縮図でもあるからだ。街が新しい言葉を生んだように、街の到るところにある気楽な空間は特有な言葉を生み、その辞書(1)があるくらいだ。カウンター文化とでも名付けられるようなものがあるのである。

フランスでの体験を下敷きにして、また多くの点において日本と比較しながら、人間臭いその空間の役回りを把握したい。

ここで一つ断って置かなければならないことがある。フランスでは、飲食物 (主に飲み物であるが) を提供する Café に似た店が他にもある。まず、Bistrot (居酒屋・安レストランなどの訳語が当てられる)、Bar (酒場・パブなどの訳語が当てられる)、Brasserie (カフェレストラン・パブ・ビヤホールなどと訳される) さらに Salon de thé (パーラー・喫茶店・ティーサロンなどと訳される) などである。日本語の訳語が誤解を呼びやすい。居酒屋・酒場などと日本で言えば、だいたい夕方から開店するもので、後者の場合などはホステスがはべることが普通であるという常識的な知識が浮かぶ。ところが、Bistrot も Bar も朝から開いているし、Bar にホステス嬢などはいない。実際に、Café との違いもあまり鮮明ではない。私の経験では、名前はそれぞれ変わり細部の違いは在るにしても、その社会的機能は殆ど同一と思われるのでこれらもすべてカフェという言葉の中に含まれるものとして考えていく。

第一章 フランスのカフェの特徴 I 空間的側面

Café の訳語は辞書によれば、喫茶店・カフェー・コーヒーショップ・スナックといったところである。共通点はいずれも座って飲み物を取る所という点である。実際、人間は一日にかなりの水分を取る必要がある。そして、長時間立っていると疲れて休みたくなるのも人情である。この人間の生理的欲求に対する社会的な回答がこのような飲食店である。時代劇に出てくる茶店は現在の喫茶店の原型であり、日本中に広まった清涼飲料水の自動販売機は合理的・即物的な回答で、それは極端に現代的である。このようにカフェあるいは喫茶店の存在理由は認知されていると言えよう。しかし、その二つの存在基盤は同一としても、その形態は国により文化圏により大いに異なる。

フランスに旅行した者ならすぐに気がつくことだが、フランスのカフェでは歩道上にテーブ

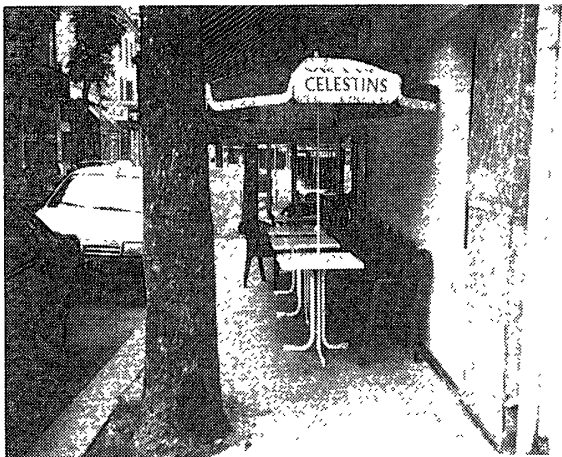
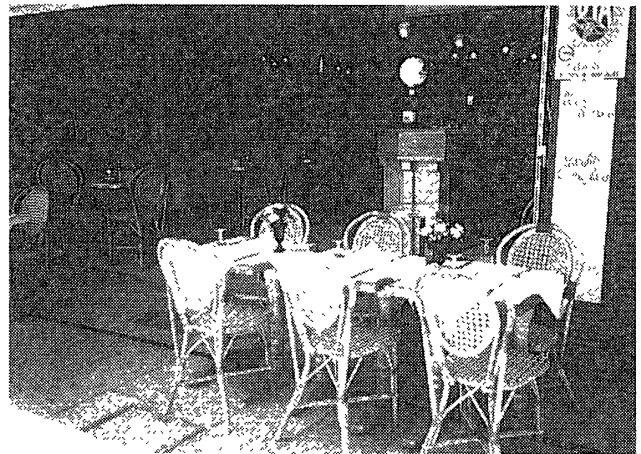


(写真 1) ビシーにて
平成四年夏

- ・歩道の上に遠慮なくテーブル・椅子が置かれる。
- ・一つのテーブルで昼食をとってる人がいる。
- ・テーブル・椅子は簡単に移動できるように小型で軽い。

(写真 2) ビシーにて
平成四年夏

- ・歩道の上に出されたテーブルで簡単な食事ができる。
- ・テーブルクロスが置かれたテーブルのうしろにカウンターが見える。
- ・カフェの内と外の仕切りは全くない。



(写真 3) ビシーにて
平成四年夏

- ・狭い歩道の上にもテーブル・椅子が持ち出される。
- ・テーブルも椅子も軽くて、質素である。

(写真 4) ビシーにて
平成四年夏

- ・このカフェの二つの出入口が開けられている。
- ・カフェの内と外の仕切りもガラスの壁である。
- ・中央市場の近くであり、日曜などは大変にぎやかである。



ル・椅子を並べて商売をしている（写真1、2、3、4を参照）。歩道がかなり広いので普通は歩行者の邪魔になることもない。しかし、場所によっては歩きにくいと我々旅行者には思われることもあるが、そんなことには頓着せずに人々は悠然と座って飲んだり食べたり喋ったりしている。昼にはランチをだすところも多く、テラスでホーク・ナイフを動かしている人間の近くを擦り抜ける時など、文化の違いを痛感する。

歩道は公共的な空間である。一方、カフェは私的な小企業である。その椅子・テーブルが世間の領域にはみ出している。不思議な光景だけれども、フランスでは当然のこととして認められている。このような公私が融合するのはカフェばかりではない。例えば、街の中で主に広場を中心に大通りなどで日常茶飯事のように青空市が立っている。野菜・果物・肉・魚などの生鮮食料品が主である。通行人に混じって、客は馴染みの商人と威勢のいい会話を楽しみながら買い物をする。当然、知り合いと出会って立ち話などする。そして、話が長くなるようなら近くのカフェに入る。日々の生活に密着したこまごまとしたサービスを提供する私的な空間が公共の自由な匿名空間と摩擦もなく自然と浸透し合っている。そこでは、自由な個人が他者と人間的な関係を持ちうる潜在的な機会が単に与えられている。個人はその機会を利用する自由も拒否する自由も保持している。市民と市民との抽象的な関係から個人と個人との具体的な関係へ移行しえる可能性が、あたかも山の中の湧き水のように無理なくそこにある。日差しを直接浴びる歩道上のテーブルと椅子はその可能性を象徴している。

パリではカフェの店主が市に対して定期的に使用料を支払わなければならない。しかし、ビシーで平成四年の夏に聞いたところによると、使用料などは一切払っていないとのことであった。すなわち、文化的に全く許容された習慣であることがよく理解できると思う。野外で飲食することは夏は実に気持ちがいい。しかし、フランスは冬寒いのでこのような習慣はないだろうと思うかもしれないが、大きなカフェになると歩道の一部をビニールハウスで囲って続けるところがある(2)。それほど、こだわるのである。逆に、日本ではこのような習慣は殆ど無い。ビヤホールなどで椅子・テーブルなどが屋外に持ち出されていても、その全体が植え込みなどで囲まれていて外から見えなくなっていることが殆どである。

カフェの出入口はどうか。日本なら、喫茶店のドアを開けると外界から遮断された居心地よい空間がある。フランスのカフェは夏のあいだは、全てが開放される（写真2、4を参照）。複数の出入口は開放されて、硝子でできた壁も開けられることがおおい。もし、硝子の壁が固定されていてもカーテンが開けられて、カフェの内部と外界を遮断するものは無くなる。一般に、一年中カフェの内部から外界が見え外部から内部が見える。カフェという建物の透明性と言えよう。内と外の境界を消去しようとする傾向である。上述の歩道を占拠する椅子・テーブルは透明性そのままであり、カフェの社会に対する開放性を象徴していると言えよう。

フランスのどこかの街のカフェに入ったとしよう。始めてならば、もどかしいような違和感を感じるであろう。椅子・テーブルが置かれてあることは間違いのないけれど、日本の喫茶店の内部とは印象がまったく違う。第一は上に述べた開放性である。その他に、内部の空間の処理が異質なのである。まず、生ビールの蛇口が据えつけられた、飲み物が用意されるカウンター（comptoir）が大きく張り出ている。カウンターのなかにパトロンらしい男が立っている。彼の後ろには、チンザノ・ポルトなどを始めとする食前酒やウイスキー・マール・コニャックといった食後酒が所狭しと並んでいる。その横にはフランスでは欠かせないコーヒー製造機がある。カウンターの前には何人かの客が立って雑談している。そして、そのカウンターの前あたりに簡素なテーブルが幾つか並べられてあり、その回りに座り心地の悪そうな椅子がこれも気

取りなく置かれている。確かに、椅子・テーブルがあるのは日本の喫茶店と同じであるが何か違うと思って眺めていると、一人で座っている男が二人連れの女に話し掛けた。女の方も面白そうに相手をしている。そうか、これだ。男のテーブルは女達のテーブルから五メートル程も離れている。しかし、テーブル席どうしの間に仕切りが無いのである。物理的・精神的な仕切りがないと言えよう。その証拠に、カフェでは自由に椅子・テーブルを移動できるのである。グループで行けば、いとも簡単にテーブルを寄せて席を作る。そのためか、カフェの椅子・テーブルは移動に向くように小型で軽い。これも違和感の原因の一つである。そして、カウンターの存在は仕切りのない場を提供しているという意味で匿名空間の中の意思疎通性を象徴している。すなわち、フランスのカフェはその内部構造においても透明性・開放性という特徴が認められるのである。

フランスのカフェにおけるカウンターの実用性・象徴性は、本稿の冒頭の私の経験からも推測されよう。カフェに入ると、テーブルに付くかカウンターに寄るか客が選択できる。もちろん、カウンターなら早く給仕されるし、パリのような大都市では料金も安いという実用的な利点もある。だが、カウンターに陣取るということに一つの前提があると思われる。それは、そこに集う人間たちとの雑談に加わるという意味表示なのである。カウンターで話をしていると、全く離れた所にいる人間が口を挟むことがあるのも、この前提を考慮すれば自然なのだ。日本人は見知らぬ人との会話が極めて苦手であるという違いを考慮して敢えて言えば、日本の気軽な立食パーティーに似ているかもしれない。我々がそのようなパーティーに参加すれば誰彼から話し掛けられても不審に思わないであろう。

第二章 フランスのカフェの特徴 そのⅡ 飲み物

カフェや喫茶店に入るのは、水分の補給と休息がその基本的な目的であろう。しかし、長い年月が経つうちに幾つかの副次的目的が生まれたのも不思議なことではない。このような飲食店は極めて日常生活に密着しており、その時代に応じて民衆の必要を一つの明確な形に表現しえる。例えば、種類のゲーム機の設置や最近ではカラオケ喫茶などもある。カフェにはタバコや雑誌類を置いているところかなり在る。宝くじ (Loerie) を売ったり、馬券売り場 (PMO) を兼ねているものもある。以前は、炭を売っていたカフェもあった。もっとも、炭売りが主で飲み物の販売はそのついでであった (bougnot)。そこで給仕される飲み物を比較すると、その点におけるカフェと喫茶店との違いが鮮明になるとと思われる。

平成四年の夏、ビシーで調べたところカフェで最もよく注文される飲み物は以下のものであった。場所・客層により多少の変化があることは当然である。

- | | |
|---------------------------|-----------------------------|
| (1) カフェ (4.5～6 F) | (2) 生ビール (8～15 F) |
| (3) ワイン (3～15 F) | (4) 食前酒 (10～15 F) |
| (5) ジュース類 (10～15 F) | (6) シロップ付ミネラルウォーター (7～15 F) |
| (7) コーラ類 (10～13 F) | (8) 紅茶類 (8～13 F) |
| (9) ウイスキーなどの食後酒 (15～30 F) | ※ Fはフランスフラン (約25円) |

このように一応のランク付けが可能であろう。しかし、カフェと生ビールの注文は他のものより際立って多いと思われる。一般に生ビール (un demi) は250ccと少量であり、ワインはワイングラスに一杯でこれも少量である。カフェも日本と比べるとカップが小さく量は半分位であろう。しかし、かなり濃い。

まず、日本の喫茶店との大きな違いはアルコール飲料の多さであろう。日本の喫茶店ではご

く稀にビールが注文される位で、アルコール飲料はほとんどない。酒が飲みたければ、居酒屋・バーなどの他の店がある。フランスではカフェであらゆる種類の酒が飲めるし、実際多くの客が一杯ひっかけている。そのほかは、ミネラルウォーターのようにフランス的な飲み物がある点の他は日本の喫茶店と大差ない。喉の渴きを癒す飲み物が並んでいる。付け加えれば、カフェではお冷や・おしぼりのサービスはない。そして、ケーキは、食堂も兼ねたカフェかパーラー (salon de thé、逐語訳では喫茶室となるが) でないと出てこない。

このように気軽に酒類が飲めることもカフェの一つの大きな特徴である。日本のように夕方になってから酒を飲むのでもなく、朝から軽くビールを飲んだりワインを飲んだりしている。体質的にアルコールに強いこと、さらに料理が肉・乳製品を中心としたものであることなども一因であると思われるが、このように酒を飲むということがフランス文化の一要素として確立しているのである。飲酒運転による死亡事故やアルコール飲料の過度の摂取による病気も多く、社会保険制度の重荷となっているけれどこの習慣を変えることは至難の業であろう。運転に関しても、一定量までのアルコールは許可されている。

さて、酒を飲むということの習慣がカフェの性格をいかに変えるか。上でカフェのカウンターのもつ意味について論じた。カウンターの中にはパトロンか誰かがいて、客の相手をしてくれる。彼らは、給仕あるいはパトロンと客という役割に束縛されずに、実に自然に人間対人間の会話をこなす。初めての客とも気軽に話をするのが、彼らの職業の一部なのだ。そうすると常連は話相手を求めて一日に何度かやって来てカウンターに陣取るということになる。そんな訳で暇な時間でも、カウンターには何人かの人間が世間話をしていることになる。

日本で馴染み深いカウンターといえ、うどんや蕎麦の立ち食いのそれか、コーヒーのスタンドであり、または居酒屋・スナック・バー・寿司屋のそれであろう。前者では、客はただ食べる・飲むという行為に専念していて無駄な会話は無い。匿名空間特有の緊張感さえ漂っている。後者では、馴染みともなればパトロン・店員・ホステスなどと会話を交わしたりすることもある。しかし、なにしろ普通の人間が毎日気軽に出入り出来るような場所ではない。主に夜の営業である。そして、そのカウンターには椅子が配置されていて客はそこに座って固定する。立っているとき独特の自由さが無い。即ち、他の客たちと気軽に話をする雰囲気がない。さらに、酒のほかに物を食べるので金がかかる。このような違いがあるが、がやがやとした居酒屋の雰囲気はカフェのカウンターのそれに似ていると思われる。その類似点の原因は酒であろう。国は変わってもアルコールは緊張をほぐし人間を多弁にするのである。

アルコール飲料がカフェで盛んに注文されるということは、以上のようにそこがコミュニケーションを生み出す場所であるということにならないであろうか。人々は喉の渴きを癒し暫しの休息を求めてカフェに入ると同時に、人との会話を求めてそこにやって来るのである。少量のアルコールが人々の緊張を取り除き雰囲気を和らげて、親しい間柄に生まれる団欒を匿名空間の中に熟成する。それは近隣の社交場でもあるのだ。

第三章 フランスのカフェの特徴 そのⅢ 経済的側面及びその数

第二章で上げた各飲み物の値段について考えてみよう。この値段はビシーで調査したものである。別に地方都市だから安いという訳ではない。例えば、パリのカフェでもだいたい同じようなものだった。もちろん、シャンゼリゼ通り・オペラ通りといった観光客の多い通りの有名なカフェの料金は例外であるから、考慮に入れない。我々の主題は生活に密着したカフェの実態なのである。しかし、パリのような大都市では一般にカウンターの方がテーブル席よりも安

い。それは給仕のサービス代を加算されないからである。ビシーでは人件費が高くないのか(フランスでは失業が大問題である)、テーブル席のサービス代が請求されなかった。それゆえに、パリではテーブルに座ったときの料金は多少高くなると思われる。しかし、コーヒーの値段の安さには驚かざるを得ない。日本円にして約110円から150円位である。男がよく飲む生ビールにしても200円から400円弱である。ワインに関しては安い物なら一杯80円位からある。その他の飲み物も、300円前後である。さて、平成四年の夏におけるフランスの最低賃金は月約5200F(約13万円、平成四年10月13日のフランの交換レートは1フラン=24.47であり、約25円として計算した)であり、カフェに入って何かを飲むには金銭的にも負担にならない。金が無いと思えば、安ワイン(80円)やコーヒー(110円~150円)で我慢すればいい。また、街のカフェも同じ場所に有りながらも客層によって料金にも差がある。労働者達が通うカフェは総じて安い。反対に、気取った資産家の婦人連中が時間潰しに行くカフェは高い。各自それぞれの懐具合に応じて選べる。

我々はもちろんカフェを選べる。しかし、次のカフェまで一キロも歩かなくてはならないとしたら、どうだろうか。そこまで行くのが気が引けよう。すなわち、我々がカフェを選ぶためには仕事場・住居或いはよく行く繁華街の近くに幾つかのカフェが軒を並べていないとならない。実際、フランスにはカフェが多い。パリなどは何処を歩いていても、カフェに入りたいと思えば幾らでも近辺に見つかる。そして、その開放性ゆえに実に入りやすい。パリはもちろん、ビシーのような田舎街でも人が通る所には必ずと言っていいほどカフェがある。テレビの普及で失われているといっても、まだまだその数はおおい。その点日本の喫茶店などは問題にならないであろう。

Chaque ville de province a son Café du commerce. Ceux qui poussent la porte (après vous, cher ami) ont ainsi l'illusion rassurante d'y venir traiter des affaires qui justifient leur présence. Ici, comme au Café de France, nous sommes entre notables. La magistrature elle-même ne dédaigne. Par méprise parfois s'y égarent deux amoureux sur une banquette.

Il y a d'autres cafés dans la ville, le Café des Sports, bruyant et véhément, celui de la gare, le Terminus, qui sent le pipi et la bière, et dans les faubourgs des estaminets populaires aux noms pittoresques: Au rendez-vous des amis, Au bon coin (c'est à l'angle), Au repos (en face du cimetière), le Va-et-vient, le Télé-bar, la Groguette, Au clairon, l'Avenir, Chez Julot, le Royal (qui fait aussi tabac), la Puce qui renifle, le Canon, Au retour du Tonkin.... —il en a tant que vous ne pouvez pas connaître tous les débits de boisson de votre ville. (François CARADEC et Robert DOISNEAU, *La Compagnie des Zincks*, p. 30, Seghners, Paris, 1991)

余りに多くのカフェがあって自分の街の全ての店を知ることは不可能である、とこの本の著者はいう。日本の喫茶店はかなり大きな町でないと無いが、フランス人が住んでいれば必需品のようにカフェがあるのである。人口が500人以下という村にもカフェが必ず2~3はあると言ってもけして大袈裟ではない。パリは、政治・経済・観光の中心であり、多くの人間たちが集まる国際的な都市である。そこには、カフェのような出会いの場所が多いのは当然であると言えるかもしれない。しかし、パリ以外のフランスの都会、リヨン・リル・ボルドー・ストラスブール・ディジョン・トールなどでも、日本であつたら銀行が軒を並べそうな、街の中心街の四つ角などには必ず多くのカフェが間口を広く開けて営業している。そこで給仕するのは、

アルバイトの女子学生ではなくて、給仕を一生の仕事として選んだと思われる蝶ネクタイをした年配の（もちろん若いものもあるが）ボーイである。客がひっきりなしに出入りしている。よく観察していると一日に何度となくやって来る客がいる。その数の多さからいっても、価格からいっても気軽に入れる場所がカフェなのである。

終章 結論として

フランスのどんな街でもいい、ただそぞろに歩いてみよう。石の街並みはその少し黒ずんだ外壁とともに我々を威圧するように思われる。特に、都会の高い建物の間を散歩すると空は四角く切り取られ頭が押さえつけられる気がする。多くの街路樹や花の植え込み、さらにはベランダに置かれた花はそのような固い雰囲気緩和するためにあるかのようだ。しかし、建物は要塞のように閉じられ人を寄せつけない。そんな中で、間口をいっぱい開いて歩道の上にテーブルや椅子を並べているカフェを見るとなやらホッとす。街が心を開いているような気になる。腕を広げて我々を歓迎しているようなこのカフェに気軽に入る。そこには開けるべきドアが無いのだ。自分の懐を心配せずに注文できるし、カウンターに陣取って常連の客と世間話に花を咲かせることも出来る。軽くビールやワインを飲むのだから、仕事の緊張も緩んで軽口や冗談が飛び交う。このようなカウンターでの面白い話を集めた本が六年前から定期的に出版されている。その1992年版の中から、面白い話を引用しよう。時事問題も出てくる。

- Le ministre de la guerre qui démissionne parce que c'est la guerre, on aura tout vu! Quand on est le ministre de la crotte on se déballonne pas quand c'est l'heure de faire caca! (J. M. Gourio, *BREVES DE COMPTOIR*, p. 19, Paris, Editions Michel Lafond 1992)
- —Mitterrand est trop vieux, d'abord tout le monde le dit!
—Moi je le dis depuis vingt ans. (Ibid. p. 93)
- Mourir d'un SIDA ou d'autre chose...je préfère autre chose remarque si on peut choisir. (Ibid. p. 107)
- —Vous buvez quelque chose?
—Oui, mais pas d'alcool.... je vais boire du vin. (Ibid. p. 147)
- Y'a pas de faux chômeurs en France, c'est plutot les vrais travailleurs qui manquent.... (Ibid. p. 148)
- —Ca me fout le cafard, la Noël.
—T'inquiète, c'est bientôt le nouvel An (Ibid. p. 166)

このように、カフェという場所ならではの気楽で面白い会話が在るのである。家族という枠で語られる話、仕事場での会話そして会議や集会で使用される言語などにはそれぞれ特徴がある。個人はそこで一つの役を演じなければならないので、その言語的表現も自然と一つの型に嵌まってしまう。カフェという空間ではそのような家族・近隣社会の束縛から自由になって、個人としての感情や意見を取り戻すのである。そこにあるのは健全で自由奔放な精神の発露なのである。仕事や家族から開放されて、社会を構成する市民としては人はものを感じ考え表現する。フランス人の個人主義は個人が孤立して生きることを意味しない。個人が他の個人となんの関係も持たずに生きていくことは不可能である。一定の役割を強制する狭い意味での社会環境から個人が自由になって生きることで出来る場所として、カフェのような空間が必要なの

であり、それゆえにまた夥しい数のそのような店が存在するのである。

社会に対する透明性・開放性、アルコール飲料を媒介とした社会的団欒性、低価格による出入りの日常性といった特徴を上げてきた。これはカフェがフランス人の生活に深く係わっている理由でもあり、また逆にフランス人の人生哲学がこのようなカフェといった特殊な空間を造り出してきたとも言えよう。そこで、フランス人の生き方、特に個人主義という点とカフェを関連させて考えてみたい。すなわち、カフェという極めて日常生活的な社会現象が人生観・世界観といかに結びついているかを考えてみたい。フランス人の個人主義は有名であるけれども、明治以来われわれは、西洋人の個人主義と日本の集団主義という図式をずっと抱いてきた、ここでは、フランス人は西洋人の中核をなしているのであるから、フランス人の個人主義を西洋人の個人主義の一つの典型として論じていく。

西洋文化を語るとき、我々は個人主義という概念を避けて通ることは出来ない。それは確かに日本人の集団主義的行動様式と比較すると際立っている。そして、西洋人においては近代的自我が確立しているのに対し、日本人においてはその自我の確立が未熟である、といった精神論的な議論がなされてきた。そして、日本人は、西洋的な堅固な自我を確立するために苦闘し、その苦闘の様を物語る近代小説なるものが生まれてきた。そういった小説での主人公は、往々にして自己同一性の証である生きる原則・主義を、あるいはそれに基づく考えを通そうとして周囲の人々と摩擦を起こし、その人間的葛藤に悩み苦しむ最後には妥協して、自己の弱さを認めざるを得なくなる、というのが大半である。その自己の葛藤の場所は我々の生活の場である家庭・職場であることが普通である。日本人の場合、それ以外の生活の場が無いので、家や会社といった場所で自我を主張して摩擦を招いてしまい、そこから除外されてしまうと、行き場所がなくなってしまう。そうすると、家出・自殺という形で問題を解決してしまうということになりやすい。そのような極端な行為は日本人の自我の不完全性を示すと解釈されてきた。最近では、西洋人の自我を絶対的な価値として、日本との文化的な差異を考慮せずに日本人の自我を断罪するといった議論は批判されるようになった。それは歓迎すべきことである。本稿の主題のフランスのカフェの特徴がまたこの問題に新しい視点を提供するように思われる。

日本では、核家族化が進み家の力・影響力は弱まったが、そのぶん学校・会社という組織が生活に網をかけていると言えよう。会社の為に身を粉にして働きついに健康を害し果ては過労死に到るといった状況は会社という怪物の威力をいかに示していると言えよう。受験の問題ももちろんであるけれど、休日でも夏の長期休暇の間でもクラブ活動というような名目で生徒を拘束しようとする学校は知識を伝達するという基本的な仕事からはみ出て、なにしろ子供達を囲い込んでおこうという姿勢が目立ってしまう。このように、日本の社会は個人を幾つかの集団それも利害関係（成績によって序列化され、同級生も競争相手であるという点で学校も疑似的な利害関係を持つと言えよう）のあるそれに所属させて、それ以外の社会的空間へ出さないようにしようという傾向が強い。

これに対して、フランスではそのような集団の圧力はまったくない。職場は多くの人にとって生活の糧を稼ぐための場所であり、仕事以外で同僚との付き合いは殆どない。管理職以外は定刻になるとすぐに帰宅する。よく働く管理職でも普通に一カ月の長期休暇をとる。学校に関しても、知識を授けるという目的以外で生徒を束縛したりはしない。その証拠にクラブ活動は無いも同様であるし（子供たちは学校以外のスポーツクラブに通う）、一年のうち、200日程の休日があり、その時は学校はふつう閉鎖される。

そうすると、人々は他者との出会いを何処かで求めるわけである。仕事で生活の糧という物

質的な満足を得るだけでは人間は全的満足を得られない。アリストテレスが「人間は社会的動物である」といったのには、深い意味があるのだと思われる。濱口恵俊が『「日本らしさ」の再発見』で説いたように、P S Hの原理(3)は人間の心理的満足にとって欠かせないものである。日本人はそれを主に自分が属する利害集団の中で得ていると言えるのに対して、フランス人はどうかと言えば、そのような満足感を先ず男女関係（そこから家族へ発展する）の中で得て、次に職場以外の友人や知己との交渉といったかなり危ういが自由な関係の中で得ていると思われる。そして、そのような関係に場を提供するのがカフェに代表されるような空間である。もちろん、個人の住居も重要な社交場であり、それゆえに住居のインテリア・快適性の個性的実現にフランス人は凌ぎを削っている。しかし、そのような人間との出会いはむしろ匿名空間でもあるカフェのような場で始まり維持されていくと考えられよう。個人の部屋は全く私的な領域であり、我々の行動はかなり規定される。例えば、許可なしに出入りすることは普通できない。しかし、カフェならば出入りは全くの自由である。いままで述べてきたように、カフェは、その開放性・団欒性・経済性から誰でもが利用できる店なのである。さらに、その匿名性ゆえの気楽さもある。あるカフェが気にいらなければ変えればよいのである。その意味では互換性もある。

このように考えていくと、カフェというものは単なる生活の贅沢品ではなく必需品であることが分かるであろう。そして、カフェのような私的な空間がフランス人の個人主義的な生活を支えている場を提供していることが理解されよう。それは彼らの心が必要とする他者との出会いが生まれるところであり、こうして生まれた人間同士の触れ合いに枠を与えているのである。喉の渇きを癒し休息を取るといった即物的な機能のほかに、人々の孤独を救い個人の心の自己実現を助けるという極めて人間的な機能を果たしている。

カフェは会話の場であるけれども、孤独を求めて来る人は沈黙を得ることも出来る。狭い意味での社会的役割から開放されるということは、個人の気持ちを表現する可能性とともに沈黙する権利を持つことを意味しよう。話したいなら話し、話したくないならば口を閉ざせばいい。カフェの会話が広い意味で社会的であるように、カフェの沈黙も社会的だ。歩道上に置かれたテーブルにつき一杯の苦いコーヒーを前に、いつまでも止まない人の群れに目をやる。部屋の中での沈黙と比べて、このカフェの無言の時間は通行人達の人生の一端に触れるかのようにあるリズムと色彩を帯び緩やかに流れていく。人はカフェのテラスに座り歩道を行き交う人間達を見ながら、自分の生きざまをそこに見ているのであろう。そして、苦いコーヒーを飲み終えると、人は立ち上がり自分の人生の中にまた戻って行くかのように足早に去っていく。

Les temps ont changé, les gens ont changé mais les cafés aussi ont changé. Depuis trois siècles, ils ont accompagné l'histoire de notre société. Ils ont été mondains, littéraires, philosophiques, politiques, populaires. Chaque groupe d'hommes a ainsi créé son lieu public. Le café du coin, c'était comme chez soi, c'était mieux que chez soi, c'était essentiel, c'était la vie. On était chez soi tout en étant chez les autres. On s'est aperçu qu'il n'était pas seulement un abreuvoir ou l'assommoir de Zola, mais que c'était aussi un lieu de parole, d'espace, de rencontre, de communication. Bref, un lieu de convivialité, un lieu social. C'est précisément la raison pour laquelle les urbanistes et architectes de Banlieues 89 (Michel Cantal-Dupart, Roland Castro) ont stigmatisé leur absence dans les grands ensembles. (Yvon LE VAILLANT, "Le zinc bat de l'aile.", *Le Nouvel Observateur* No 1411, du 21 au 27 novembre 1991, pp. 44—47)

伝統的なカフェという憩いの場・出会いの場が、テレビなどの視聴覚の機器の個人生活への深い浸透やマクドナルドなどのファーストフードの店の急増などで次第に衰退していることが統計的に確認されている。本稿では、カフェの現代の変遷とその原因・影響には迫ることが出来なかった。しかし、フランス人の生活になくはならないカフェは多少の変化は被ってもけして消滅していくことはないであろう。現代の情報化社会の中で、フランス人の生活が、その個人主義的な生き方が変化するに従ってカフェも変わっていくであろう。現代という時代は脱工業化の過渡期なのであり、フランス人の生活が一定の落ち着きを取り戻すのにかなりの時間が掛かるであろう。その物理的環境と人間関係の変遷を経た後で、時代に適応した個人主義のあらたな表現としてカフェの新しい姿を我々を見ることになるであろう。そこから、独特なカフェ文化が生まれてくるであろう。

註

- (1) Robert Giraud. *L'Argot du Bistrot*, Paris, Marval, 1989
- (2) 例えば、パリのモンパルナスにある有名なカフェ、ラ＝クーポール (La Coupole) がある。下中 弥三郎編 世界文化地理体系19巻 フランス (平凡社 1954年) のp. 299に写真がある。
- (3) 濱口恵俊 『「日本らしさ」の再発見』(講談社 1988年) の pp. 164～179を参照のこと。
※ カフェに関する写真については以下を参照のこと。
 - － 鈴木郁三編 世界文化シリーズ1 フランス 世界文化社 1961のpp.12-13, p. 30, p. 51, p. 61
 - － 上記の世界文化地理体系19巻 フランスの p. 107, p. 122, p. 211, pp. 217-218, p. 277, p. 297
 - － 文中で引用した著作 *La Compagnie des Zincs* のp.7, p.9, p.15, p.29, p.31, p.41, p.43, p.49, p.57, p.63, p.65, p.71, p.77, p.89, p.95, p.105, p.111, p.125, p.135, p.145, p.147
 - － 上記の *L'Argot du Bistrot* のP.30, P.76, pp.83-84, p.110, p.113, p.117, p.122, p.125, p.130
 - － 付記－ 本稿は名古屋女子大学教育研究所の平成4年度一般研究助成の成果の一部である。